写真７　瓦櫓櫓台と背面石垣４部分（南西から）

m、南北 4.5 ～ 4.8 mです。

これらの石垣は、江戸時代の絵図から、瓦屋根が葺かれた土塀の基礎の石垣と考えられます。土塀は現在解体を行っている石垣上面全体に築かれていたものであることから、昭和 40 ～ 41 年に修理を行った部分にもこのような背面石垣があったと考えられます。

今回新たに行った発掘調査により、解体調査ですでに確認されていた背面石垣２の延長線上に土塀の基礎の石垣が遺存していることが分かりました。

背面でみつかった石垣の一部は瓦櫓の櫓台石垣となっています。背面の石の積み方から、櫓台石垣が積まれ、その後に土塀の基礎石垣が築かれたことが分かります。

石垣の解体修理の過程でみつかった背面石垣や排水溝、新たに発掘調査を行った箇所でみつかった背面石垣については、今後調査成果を精査し、石垣の構築過程や遺構の性格を明らかにしていく予定です。

厩堀法面災害復旧工事が完了しました

平成 30 年７月豪雨によって崩落した厩堀の法面災害復旧工事が完了しました。

この法面は、津山城の遺構として重要なものであるため、文化財として、崩落前の姿に戻すことを前提として復旧工事を実施したものです。

工事は、史跡津山城跡整備事業で初めて連続繊維補強土工（ジオファイバー工法）という工法を用いて行われました。まず崩落した土砂を取り除き、法面を成形し、地山補強として鉄筋挿入を行いました。これにより、地山自体の抵抗力を高めるとともに、連続繊維補強土と地山との一体化を図ります。

その後、連続繊維補強土を吹き付けます。これは、砂質土と連続繊維（ポリエステル）を水とともに噴射・混合して、法面に厚い土構造物を構築するもので、これにより、崩落前の法面に復旧しました。施工後は景観回復のため植生シートを敷設しました。

また、法下における崩落防止措置として、法下にふとんカゴを設置しました。

平成 30 年から３箇年にわたって実施してきた７月豪雨に伴う災害復旧事業はすべて終了しました。

近年頻発する大雨やゲリラ豪雨などに備え、今後も排水対策を講じていく予定です。

写真８　連続繊維補強土工（令和２年 12 月撮影）（西から）

写真９　厩堀法面崩落状況（平成 31 年１月撮影）（北西から）

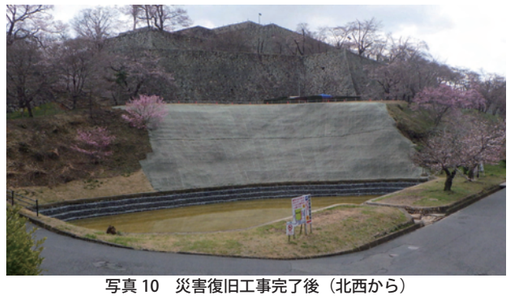

写真 10　災害復旧工事完了後（北西から）
※緑化のため植生シートを敷設しています。ふとんカゴは今後水位が元に戻ると隠れます

津山城だより No.25 2021年3月 津山市産業文化部 文化課

発行年月日	令和３年３月 31 日
編集・発行	津山市産業文化部文化課 （令和２年４月から産業文化部に改組されました） 〒 708-0824 岡山県津山市沼 600-1 ＴＥＬ （0868）24 － 8413
印　　刷	福井印刷株式会社

津山城だより TSUYAMAJODAYORI No.25 2021年3月 津山市産業文化部 文化課

写真１　二の丸東側石垣（東からドローンで撮影）

二の丸東側石垣解体中です

令和元年度から実施している二の丸東側石垣の修理工事は、現在石垣の解体を行っています。

解体修理は、石垣の解体と積み直しを行うのはもちろんですが、解体にあたり、様々な調査を行う必要があります。解体する石そのものの調査や、普段は決してみることのできない石垣の背面（裏側）の情報を得るための発掘調査などです。一度解体すればオリジナルの部分がなくなってしまうところもあるため、背面の情報をできるだけ記録に残し、それらをどのように修理工事に活かしていくのかは、非常に重要です。

今回は、前号に引き続き、二の丸東側石垣解体修理工事をとりあげ、調査でこれまでに分かったことについて紹介します（二の丸東側石垣の説明については津山城だより第 24 号をご覧下さい）。

また、平成 30 年７月豪雨によって崩落した厩堀の法面の復旧工事が終了したので、あわせて紹介します。

石垣背面からみつかった遺構

背面石列（写真２）　令和２年３月末から、解体予定石垣の天端面の発掘調査を開始し、調査を進めたところ、北側の部分で、背面に石列のあることが確認されました。確認された石列は、解体している石垣の入隅（いりずみ）（石垣がくの字に折れ曲がったところ）から北側で、石垣から約３m内側に入ったところでみつかりました。

石列は全長約 9.5 mで、天端には 14 個の石が面を揃えた状態で１列に並んでいます（図１赤色部分）。南側では一部抜けているところもありました。石の北側は、さらに北にある雁木（がんぎ）（石の階段）の袖石垣に接続しています（図１Ａ－Ａ'立面）。

背面石垣１（写真３）　背面石列の石を撤去すると、撤去した石よりも少し内側（東側）で石垣が確認されました。さらに調査を進めると、内側の石垣は背面石列の下で確認されていた石垣で、隅角石とみられていた石（写真２、３の黄色で囲った石）から東へ折れ曲がってつながっていたことから、背面石列の下にある石垣は背面石垣１の石垣であることが明らかになりました（図１青色部分）。石垣の高さ（地表面からの深さ）は最も深いところで５段程度（２m弱）積まれています。石垣の全長は約 12 mになります。背面石垣１の南側は、石垣の排水溝があるところまで続き、排水溝から南には続いていませんでした。

暗渠排水（写真４）　石垣の面に穴が空いている箇所があります。これは城内からの排水を行うための排水溝で、今回の解体工事により、内部の状況を確認することができました。排水溝の側壁には３～４個の石が使われ、底には板状の石が敷かれています。天井は４個の石で蓋がされていました。溝の内側から鉄釘が複数出土したことから、内部には木樋が存在していたと考えられます。

背面石垣２（写真５）　石垣の入隅から南側にかけては、石垣の天端から内側に約 1.8 m、天端から約 40 ㎝程度下がったところに、石が１石ずつ、並んだ状態でみられました（図１黄色部分）。この石垣は、後述する背面石垣３につながる遺構と考えられます。石列は石垣の上にあったとされる土塀の基礎石と推測されますが、解体している石垣天端よりも低いことから、もう１石上に石があった可能性が考えられます。

背面石垣３・４、櫓台石垣（写真６、７）　土塀の基礎石の続きを確認するため、解体範囲より南側の石垣背面の発掘調査を行いました（図１緑色部分）。調査区の一部は「瓦櫓」という櫓が存在した部分にあたります。

発掘調査の結果、石垣の背面から石垣がみつかりました。もともと表面に一部の石が露出していたことから、何らかの遺構が残っている可能性は考えられていましたが、３段から４段の石垣であることは今回の調査により初めて分かりました。石垣は、発掘調査区の北側については、昭和 40、41 年度の石垣修理のために一部石が動いていますが、それ以外は良好な状態で遺存していました（背面石垣３）。現在解体している表側の石垣と背面石垣の幅は約 1.8 m、高さは 1.6 mあります。

背面石垣３の南には、瓦櫓の櫓台石垣があり、櫓台石垣を挟んで南側で位置を東にずらして背面石垣と同様の石垣がみられます（背面石垣４）。櫓台石垣の幅は東西 3.3

写真２　背面石列（北西から）

写真４　暗渠排水（蓋を外した状態）

写真３　背面石垣１（西から）

写真５　背面石垣２（北西から）

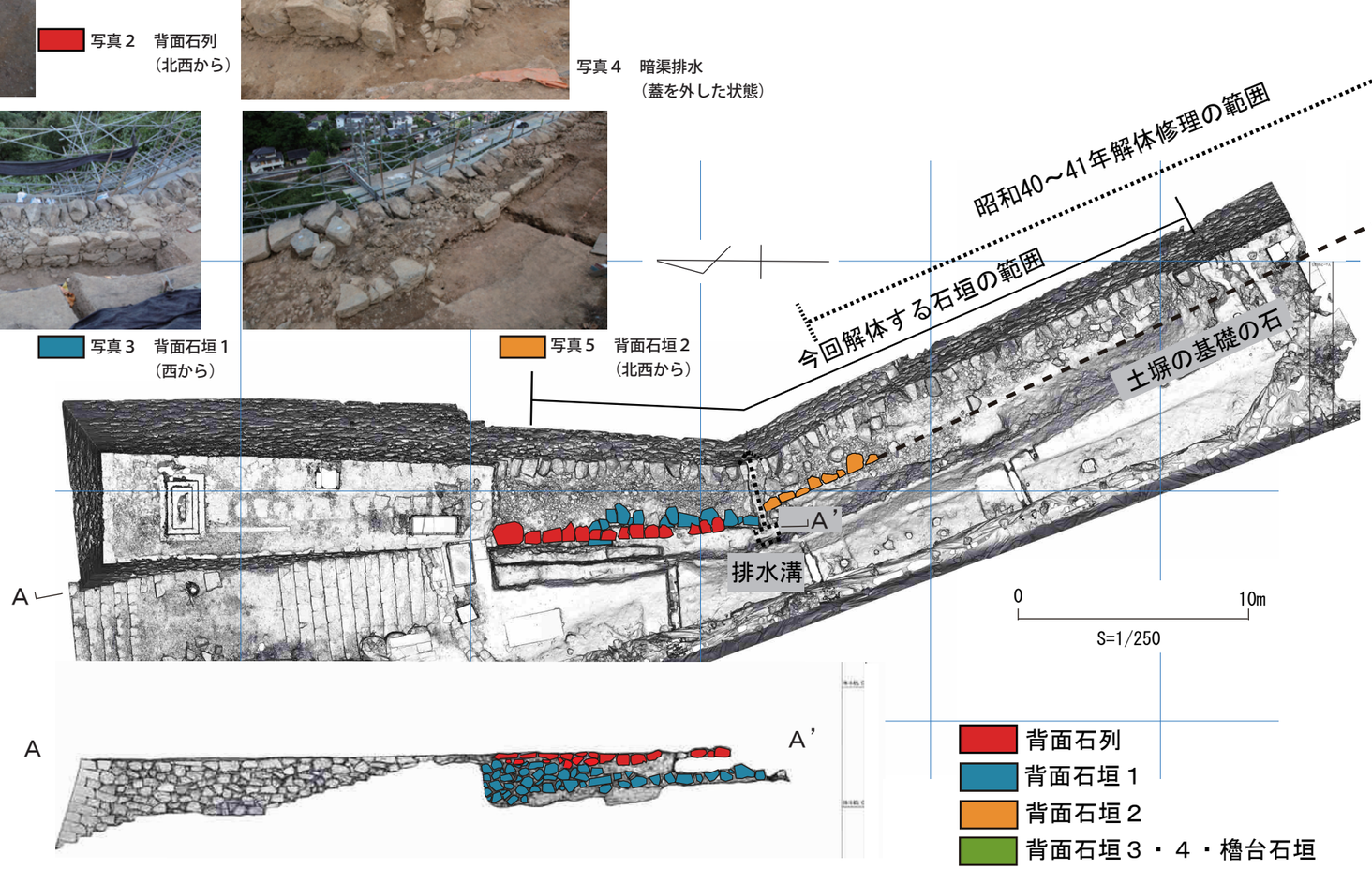

図１　二の丸東側石垣背面の発掘調査平面図及び背面石垣立面図（S=1/250）
（石垣を上から見た３次元測量陰影図に遺構を着色して重ねたもの）

写真６　背面石垣３・４、櫓台石垣（写真中央が瓦櫓の櫓台、西から）